

「ヒマラヤ 地上8,000メートルの絆」 ★★★

2016 (平成28)年8月13日鑑賞<シネ・リーブル梅田>

監督:イ・ソクフン

オム・ホンギル (ヒューマン遠征隊を率いる登山家) / ファン・ジョンミン

パク・ムテク (ホンギルの後輩、遠征隊員) / チョンウ

イ・ドンギユ (ホンギルの兄貴分、遠征隊員) / チョ・ソンハ

パク・ジョンボク (ムテクの大学からの先輩、遠征隊員) / キム・イングオン

チョ・ミョンエ (遠征隊の紅一点) / ラ・ミラン

キム・ムヨン (遠征隊員) キム・ウォネ

チャン・チョルグ (ムテクを見捨てた遠征隊員) / イ・ヘヨン

チョン・ベス (遠征隊のムードメーカー隊員) / チョン・ベス

チェ・スヨン (ムテクの妻) / チョン・ユミ

チェ・ソンホ (ホンギルの妻) / ユソン

2015年・韓国映画・124分

配給/CJ Entertainment Japan

◆「エベレスト」ものは近時、洋画では『エベレスト 3D』(15年)(『シネマルーム37』82頁参照)、邦画では『エヴェレスト 神々の山嶺』(16年)(『シネマルーム37』86頁参照)と続いたが、今度は韓国版の「エベレスト」ものが登場!これも実話にもとづくもので、アジア人としてはじめてエベレストをはじめとする8000メートル峰14座をすべて登頂した山岳家オム・ホンギル(ファン・ジョンミン)を隊長とする、2005年の「ヒューマン遠征隊」の姿を描くもの。

このチャレンジが「ヒューマン遠征隊」と名付けられたのは、ホンギルが遭難死した最愛の後輩パク・ムテク(チョンウ)と、その救助に向かいながら一緒に命を失ったパク・ジョンボク(キム・イングオン)の遺体を回収するという目的のために、ホンギルとかつての仲間たちが記録も名誉も補償も求めず、命をかけてエベレストのデスゾーンに向かったためだ。なるほど、そんな話がホントにあったとすれば素晴らしいことに違いないが、少し別の視点で考えてみれば、その当否は?

◆本作導入部から中盤にかけては、既に有名な登山家になっているホンギル隊長たちのスタッフと、その下っ端として新たに入ってくるムテクとジョンボク2人との心の交流が描かれる。「エベレスト」ものが過酷なものになるのは当然で、『エベレスト 3D』も、『エヴェレスト 神々の山嶺』も悲壮感いっぱいだったが、韓国版の「エベレスト」ものたる本作では中盤までは悲壮感はあまりなく、むしろユーモアがいっぱい。

ホンギルたちによるムテクとジョンボクのしごき方にもどこかユーモアがあるが、これは私の独断と偏見によれば、韓国人特有のオーバーな感情の表現と韓国語の言い回しのため・・・?下っ端として訓練を受けているムテクのもとを、さらに大学の山岳部の後輩の女性チェ・スヨン(チョン・ユミ)が訪れてくるシーンや、その後の2人の仲睦まじい様子を見ていても、ユーモア色がいっぱい。もっとも、それが本作ラストでは素晴らしいラブストーリーに昇華していくので、その点に注目!

◆ホンギルがムテクとの間で14座すべての登頂を約束したにもかかわらずそれを諦めたのは、右足のケガのため。これ以上登頂を続けていけば、車椅子生活になるかもしれないとわかったからだ。その結果、ムテクは「まだまだ無理」と言っていた隊長の地位を引き受けてエベレストに挑戦したところ、登頂には成功したものの、下りで動けなくなることに。各国の遠征隊に対して必死の救助を呼びかけたにもかかわらず、どの国もそれに応じない中、一人ムテクの救助に向かったジョンボクも、ムテクを発見したものの一緒に死亡してしまうことに。

そんな状況下、ムテクの葬儀に臨んだホンギルに対して妻のチェ・ソンホ(ユソン)は、「遺体もない葬儀なんて・・・」と訴えたことが契機となって、ホンギルは「ヒューマン遠征隊」を編成することに。もっとも、本作後半から始まるこのストーリーでは、既に山岳家から他の仕事に転職しているホンギルのかつての仲間たちは遠征隊への参加を拒んでいたのに一体なぜ?そこらあたりが不思議なところだが、韓国は日本以上の義理人情の国・・・?

◆「エベレスト」ものでは常に「進むべきかそれとも退くべきか」が究極の問題となり、「退く勇気」がいかに大切かを学ぶものが多い。『エヴェレスト 神々の山嶺』では、1924年にエベレスト登頂を目指しながら消息を断ったジョージ・マロリーの遺体が1999年に発見されたことがストーリー形成の大きなポイントになっていたが、エベレストの雪と氷の中で眠っている遺体は100体以上あるらしい。これらの遺体は凍結しているから、冷凍保存状態のまま。しかし、遺体がどこにあるかわからないから、その発見と回収は、頂上を目指す以上に難しい作業になる。しかも、本作に見るホンギル率いるヒューマン遠征隊は、運悪く悪天候が続いたうえ、ホンギルの足の状態も悪化、隊員たちの疲労度も極限状態だったから、これ以上無理をすればえらいことに・・・。そんな状態の中、さて本作が見せるストーリー展開は・・・?

『国際市場で逢いましょう』(14年)(『シネマルーム36』58頁参照)、『ベテラン』(15年)で1000万人以上の観客動員をしたファン・ジョンミンが、本作でもホンギル隊長を演じて800万人を動員したそう。そう聞くと、韓国人はやっぱりこの手の感動ものが大好き・・・?